



分科会 5 セルフメディケーションと薬剤師の役割

10月7日(日) 13:30～16:00 第6会場(アクトシティ浜松 研修交流センター 2F 音楽工房ホール)

W-05-01

基調講演 セルフメディケーションの現状と将来

やまもと ふみ
山本 史

厚生労働省医薬食品局総務課薬事企画官

薬剤師調査によれば、平成22年12月末時点での全国の届出「薬剤師数」は約28万人。勤務先別で見れば、薬局に約15万人、病院・診療所に約5万人。薬局は全国で約5万カ所。そして、今春、6年制薬学教育の一期生約8千人が新たに薬剤師としての活動を始めた。

今日、疾病を治療・予防し、健康を確保する上で薬は大きな役割を果たしている。一方、医療を取り巻く環境は大きく動いている。技術の進歩は著しく、医療現場には次々に新しい薬が導入されるなど、医療の高度化・多様化が進む。その傍ら、誰でも安心して在宅で療養できるよう在宅医療の推進など医療サービスも変化が求められている。

その状況下、当然に、現場に立つ薬剤師に求められる活動も拡がりを見せている。病院では、患者一人一人にあわせた最適な薬物療法を提供するため、チーム医療の中で、他の医療職種と協働しながら、調剤室のみならず病棟において積極的に活動していくことが期待されている。地域では、退院して自宅に戻った患者が引き続き良質の医療サービスを受けられるよう、地域の薬局薬剤師も、地域の医師、看護師等や介護スタッフと連携しながら、これもまたチーム医療の一員として、在宅医療の活動に参加していくことが強く求められている。さらに、地域の薬局は、一般用医薬品などを活用した軽医療の現場でもある。患者の症状などに応じて薬の選択や対処方法について助言を行い、地域住民の方々が気軽に健康や薬について相談をすることができる薬の専門家として機能すべきである。

多岐にわたるこれらの活動であるが、どれも、個々の患者に対応して、薬のリスクを最小限に抑え、そのベネフィットを十分に活用できるよう、薬の専門家として取り組むという薬剤師の役割は共通であり、これまでの活動の延長でもある。しかし、今日現在、地域における薬局と薬剤師が十二分にその機能を発揮しているといえるであろうか。特に、セルフメディケーションの観点からいえば、全国5万カ所の薬局が、地域の医療機関などと協働し、地域住民にとっての頼りになる健康の相談の場として機能できるかどうか、今後の国民の健康や医療を考える上で重要である。地域の医療の現場で活動する薬剤師は、それぞれの立場で、患者と薬をつなぐ専門家として、必要な研鑽をつみながら、次の一歩を、踏み出す時期である。